学苑　No. 793　(46)～(55)（2006・11）

オカルト現象としての聖母マリア
—オカルトの世紀と聖母マリア（その2）[1]—

大　野　英　士

0.

カトリック教会は，大革命を通じて甚大な物理的・精神的被害を被っていた。19世紀初頭，ある司教が宗教大臣に提出した報告によると，彼の司教区では百以上の小教区教会で司祭が不在であった。そして，司祭のいない教会に教区の外から出張する外勤司祭のための住居が不足しているため，まもなく，他の多くの教会も同じ運命をたどるだろう，と語っていたという[2]。実際，ほとんど全ての教会が，内部の装飾や家具を失い，むき出しの壁だけになっていた。革命中，大量の聖職者が処刑されたり，還俗させられた。革命後も新たに聖職につくものは少なく，聖職者の高齢化がすすんでいた。信者の数も激減し，革命前の水準に回復するのには世紀の半ばを待たなければならなかった。

カトリックは第一帝政下の1801年，教皇ピウス7世 Pius（Pie）VII（1742–1823）とナポレオン1世 Napoléon Ier（1769–1821）の間で結ばれた政教条約 Concordat（1801）によって「フランス人大多数の宗教」として復活したが，1815年の王政復古とともに文学者シャトーブリアン François René de Chateaubriand（1867–1848）が「正統な王と亡霊の時代」ère de rois et de spectres légitimes[3]と呼ぶ新たな時代を迎えた。このことは，単にブルボン家の王が王位に復帰したことによって，教会が組織として再建され，あらためて社会的に認知されたことを意味するだけではない。問題は王政復古を機に，カトリック＝王党派を中心にある種のイデオロギーが形成され，それが19世紀の社会や文化に持続的な影響を及ぼしたということなのである。要約すれば，「革命は“父なる神”に対する重大な侵害であり，人間が犯した侮辱に対して神は激怒している。フランス民衆よ，汝らの罪を悔い改めよ」ということになるだろうか？

本稿では，大革命後に広がったフランス保守主義の宗教的イデオロギーの構造と，それの周辺に展開した特異な「オカルト現象」である聖母マリアの出現を取り上げ，その歴史的・文学的な意味を探っていくことにしたい。

I.

二つの「死体愛」nécrophilie 的事件がきっかけとなった。

第一の事件とは，ルイ16世 Louis XVI（1754–1793）の遺骸の発見である。1815年1月18日から19日にかけて，マドレーヌ墓地[4]の片隅で，ルイ16世と王妃マリー・アントワネット Marie-Antoinette（1755–1793）のものとおぼしき遺骨が見つかった。王の遺骸は，処刑から22年目の記念日にあたる1月22日，サン＝ドニ[5]の歴代フランス王の墳墓に荘重な儀礼とともに改葬された。

第二の事件は，ベリー公 Charles Ferdinand, duc de Berry（1778–1820）の暗殺である。1820年2

月13日の深夜，ブルボン家の最後の子孫であったベリー公が，オペラ座を出ようとした時，ルイ＝ピエール・ルヴェル Louis-Pierre Louvel（1783-1820）なる男に背後から短剣を刺され，翌日の明け方その傷がもとに息を引き取った。ルヴェルは民衆出身で，幼くして両親を亡くし，孤児院に預けられたり，長姉の家に引き取られるなど，あまり幸福とはいえない幼年期を過ごした。長じて，馬具作りの職工となったが，1814年，ブルボン王家と結んでナポレオンを倒した外国軍隊がフランスに進駐したことに憤激し，ブルボン家の人間を殺害することを決意した。そして数年間の入念な計画にもとづき，この年，ついに自らの意思を実現した[6]。ルヴェルは1820年6月に処刑されたが，みじんの後悔もみせず，キリスト教への回心も拒んで平然と断頭台に上った。まさに，革命的民衆の精神を象徴的に体現したような人物だった。

これらの事件は，大革命の記憶を呼び覚まし，民衆の間にまだくすぶっていた貴族や特権階級に対する憎悪を再びかき立てかねない危険性を秘めていた。カトリック＝王党派の周辺の人間は，逆に，こうした機会を捉えて，革命こそ神に対する重大な犯罪であり，神はフランスに対して烈火のごとく怒っている。今こそ神の前に悔い改めて犯した罪を贖い，「修復」しなければならない，という立場をとった。それはフランス民衆を再教化し，旧秩序への忠誠を回復させるための一大キャンペーンだった。

「王殺し，父殺し，神殺し」という三重の殺戮に対する，フランス民衆の心の深層に潜む悔恨は最大限に利用された。カトリック＝王党派の思想家は口々に叫びだした。ルイ16世処刑は，革命派の犯した罪であるばかりでなく，フランス全体の罪である。大革命自体，贖罪し，修復し，悪魔払いしなければならない災禍なのだ，と。1814年に書かれたあるテクストの中で，ジョゼフ・ド・メーストル Joseph de Maistre（1753-1821）は，フランス人がルイ16世の処刑に対して無関心だったことを，悲愴な口調で糾弾している。

> もう一つ重要な観察をしなければならない。君主に対して国民の名において犯されたあらゆる犯罪は，常に多かれ少なかれ国民の罪なのである。なにがしかの数の過激分子が，国民の名のもとに，このような犯罪を犯すことができたということは，多かれ少なかれ国民に過ちがあったからなのである。たとえば，フランス人全員が王の死を望んだということではあるまい。（中略）しかし，圧倒的に多くのフランス人が，ありとある狂気，ありとある不正を望んだのであり，それが1月21日の破局へとつながったのだ。（中略）ルイ16世陛下のお流しになった血の一滴一滴を，フランス中で流れる早瀬の水に匹敵するような大量の血であがなわなくてはならなくなるだろう。4千万のフランス国民は，自らの首をもって，反宗教的・反社会的な暴動によって国王を弑逆するという国民規模の大犯罪をつぐなわなければならなくなるだろう[7]。

少なくとも王党派のいうところによれば，フランス国民は，ルイ16世が断頭台の露と消えたこの運命の日から，いうなればカイン[8]や「さまよえるユダヤ人」[9]同様「呪われた存在になった」[10]。大革命後のフランスは，フランス国民の上にみずから殺した「父なる神」が，復讐の鉄槌を下すかも知れないという恐怖に怯えることになったのだ。すでに神の呪いは禍々しい災厄となってフランス国民の上に襲いかかってはいなかっただろうか？ テロルの語源ともなった恐怖政治のもと，まさにカインのように何万という数の人間が殺戮された。ナポレオン戦争にかり出された兵士達は「さまよえるユダヤ人」さながら世界の果てまで彷徨うことを余儀なくされた。

「神の摂理によって」ブルボン家が祖先から受け継いだ王座に返り咲いた王政復古はフランス人にとって，思いもかけぬ悔恨と痛惜の機会を提供した。聖職者も，思想家，文学者も，およそ王党派に連なる人々は，こぞって，フランスの民衆に対して，カトリック教会に復帰し悔悛の勤行を行うように呼びかけた。この文脈で，生前は「錠前屋」とか，「太っちょの豚」とあだ名され，軽蔑の的だったルイ 16 世のイメージは「殉教者」「救済者」に祭りあげられた。

ジョゼフ・ド・メーストルは，先に引用した箇所から数ページ先で，ギリシャ悲劇のオレステース[11]や，ローマの執政官デシウス[12]の故事を引きながら，ルイ 16 世の死は神の怒りを鎮め，フランス国民の罪を贖うために自らの命を捧げた犠牲であるとの解釈を示している。ここでメーストルが述べている「転換の教義」という言葉にはちょっと注意をとめておいて欲しい。ユイスマンスとブーランの関係を考える際，きわめて歪曲された形ではあるが，この教理をさんざん目にすることになると思われるからである。

> 切実に感ずることだが，我々はいずれの状況にあっても，無実の人間が罪人とともに滅び去るうんざりするような場面に絶えず直面させられてきた。このことはきわめて深淵な原因に由来している。しかし，そこまで踏み込まずとも，我々がこの問題を考察できるのは，あの世界開闢にさかのぼる古くて普遍的な原理，無実の人間の苦痛が罪人を救うという転換の原理との関係を考慮にいれた場合のみなのである。
>
> 古代の人々は，全世界で，供犠を行い，それが生きている人間にも，死者にも役立つと考えていたが，思うに，彼らは犠牲を捧げるという慣習をこの原理から思いついたのだ。この象徴的な慣習にすっかり慣れ親しんだため，我々は大しておどろきもしないが，その起源は何かと問えば，はっきりしたことはわからない。
>
> 古代にあってあれほど名声を博した献身もまた，この教義に由来している。デシウスは，自分の生命を犠牲にすれば，神々に受けいれられ，故国ローマを脅かすあらゆる災厄に均衡をもたらすことになると信じていた。
>
> その後キリスト教が現れてこの原理を神聖なものとした。この原理は理性によって到達するのは困難におもわれるが，人間にとっては限りなく自然なものなのである。
>
> だから，ルイ 16 世や，天使のようなエリザベート[13]の心に，かのごとく行動し，かのごとく過酷な運命を受けいれれば，フランスを救うことができるのだという考えがあったとしても不思議ではない[14]。

II.

しかし，ここでまた，19 世紀特有の奇妙な現象が生じた。キリスト教の伝統からすると，神学的にも歴史的にも，父なる神の怒りを解き，人類と神とを和解させる役割を担っていたのは神の子イエスであった。ところが，19 世紀初頭，三位一体をなす神の位格，特にこの「父」と「子」の間のバランスにめだった変調が生じていたというのだ。

> 父なる神は死んだ。人間が神を殺したのだ。しかし，死んだはずの神は，あたかも死せることで，旧約の復讐神の禍々しい怒りを幾百倍にも増大させたかのようであった。この先例のない神

の怒りの前に，イエスは，たとえ完全に無力をさらけだしたということはないにせよ，あまりに力不足だった。不信心な人間に裏切られ，イエスの腕は重くしなだれ，父の怒りを静めることなど到底不可能だった[15]。

この事態に対し，19世紀のカトリック社会の想像力は，弱体化した調停者イエスの力を補足するため，二つの副次的な処方箋を用意した。聖心崇拝と聖母マリア崇拝である。聖心崇拝とは，イエスの「聖なる心臓」に対する信仰だ。サクレ・クール寺院の「聖心（サクレ・クール）」，聖心女子大学の「聖心」である。ただ，イエスの「聖なる心臓」に対する信仰は19世紀に始まったわけではない。フランスに「聖心」信仰が広まった契機は17世紀のマルグリット＝マリー・アラコック Marguerite-Marie Alacoque（1647–1690）あたりにさかのぼるだろうか？　フランス最高の肉質を誇る白い肉牛で有名なシャロレー地方ヴェロスヴルの公証人の家に生まれたマルグリット・アラコックは，1671年，パレ＝ル＝モニアルの聖母訪問会修道院に入った。1672年に誓願をたて正式に修道女となったが，翌1673年からその彼女の元に頻繁にイエス・キリストが現れるようになった。キリストは慈愛に満ちた自らの「心」に対する信仰をすすめ，聖体の主日（精霊降誕後の第一主日後の木曜）の八日間（オクターヴ）後の金曜を「聖心」の祝日と定めて祝うように命じた。聖母訪問会は当初，必ずしもキリストの啓示を熱意をもって受けいれたわけではなかった。しかし，イエズス会の神父クロード・ド・ラ・コロンビエール神父 Claude de la Colombière（1641–1682）という支援者が現れ，聖母訪問会で1688年にはじめて聖心の祝日が祝われることになった。アラコックは，ブーラン Josephe-Antoine Boullan（1824–1893）[16]，ユイスマンス J.-K. Huysmans（1948–1907）にも関係深い聖女である。

聖心崇拝は聖職者の一部からの「イエスの心臓を崇拝するなら，他の器官，キリストの性腺やキリストの脳を崇拝しない法があろうか」などとする攻撃もあって，一時後退していたが，王政復古と共に王党派の政治戦略と結びつく形で再び盛んになった。バルザック Honoré de Balzac（1799–1850）やバルベー・ドルヴィイー Jules Barbey d'Aurevilly（1808–1889）の小説で有名なヴァンデ地方の王党派反乱軍「フクロウ党」の党員は胸に「聖心」のワッペンをつけていた。また，王政復古とともに表舞台に返り咲いたイエズス会は，ルイ16世がタンプル牢獄幽閉中にしたためたという「文書」を流布するとともに，フランスの地方の町々に聖心の名を冠した修道会を設立し，組織的な聖心普及キャンペーンを張っていった。その文書によれば，ルイ16世はタンプル牢獄で，自分自身とフランスとをキリストの聖心に捧げたというのである。ローマ教皇ピウス9世 Pius（Pie）IX（1792–1878）は，1856年に「聖心の祭日」を正式にカトリック教会暦に採用し，1864年にはマルグリット・アラコックを福者の列に加えている[17]。今やエッフェル塔と並んでパリの代名詞的存在であるモンマルトルの丘にそびえる白亜の教会サクレ・クール寺院 Basilique du Sacré-Cœur は，普仏戦争の敗戦後の1871年，こうした19世紀の「聖心」信仰（とその政治利用と）を集大成する形で国民議会で建設が決まった。1874年[18]，建築家のポール・アバディ Paul Abadie（1812–1884）が設計コンクールに勝って注文を獲得し，1875年に最初の礎石が置かれたが，完成するのは建築家の死後1919年のことである。

聖心信仰が比較的新しい現象であるのに対し，聖母マリア崇拝は初期教会にさかのぼる古い歴史をもつ。しかし，19世紀の「マリア熱」につらなる直接の先駆は，ルイ＝マリー・グリニョン・ド・モンフォール Louis-Marie Grignion de Montfort（1673–1816）や，アルフォンス・ド・リギュオ

リ Alphonse de Liguori（1696–1787）といった18世紀の宗教者に求めることができる。聖母マリア信仰は，聖心信仰と奇妙に混淆しながら[18]19世紀フランス民衆の宗教感情を支える主要な後見者の役割を果たすことになる。革命後，総裁政府時代からすでに贖罪と修復を誓願し，聖母マリアに特別な崇敬をささげる修道会，信心会が多数作られるようになった。特に，この時期，聖母マリア崇拝は古くからカトリック教会のなかにあった「聖母マリアの処女懐胎（聖母の無原罪の御宿り）」という教義を再び取り上げ，この姿のもとに彼女に特別な崇敬を捧げた。後に述べるように，ローマ教会が，この教義を「公認する」にいたるにはさらに数十年を要することになる。

19世紀を通じて，聖母マリアは，素朴で，多様な民衆の信仰と想像力を受けいれる容器として機能することとなった。彼らは聖母マリアという形象に付与されていた「愛」の力を頼りに，「処女にして母」「神の娘であり妻であり，神の母」なる聖母マリアにキリストに代わる新たな調停者の役割を見いだそうとした。また，聖母マリアは，当時の神学者の心配や警戒[19]をよそに，しばしば古代以来の大地母神崇拝，処女神崇拝と結合して新しい「女神」となった。『ミューズとマドンナ』の著者，ステファン・ミショーによれば，この点で危険な臨界線を越えるきっかけをあたえたのは文学者のシャトーブリアンだったという[20]。彼は，『キリスト教精髄』の中で，感情を高ぶらせて，聖母マリアを女神へと祭りあげてしまう。

> 聖母マリアは無垢と，弱さと，不幸の女神だ。教会で，彼女に崇敬を捧げる者達の群れは，彼女が難破から救った船乗りや，フランスが敵の刃にさらされたとき，死から助け出してやった年老いた廃兵や，苦しみを和らげてやった若い女達からなっている。この若い女達は，彼女らの乳飲み子を聖母マリアの御姿の前に連れてくる。子供達の心は，まだ天の神のことはわからないにしても，自らの腕に御子を抱いた，崇高な母のことはすでに理解するのである[21]。

さらには，聖母の加護を恃んでフェミニスムや社会主義など，さまざまな問題をめぐる闘争が組織されるなど，聖母マリアはイデオロギー的な装置としてすら機能した[22]。

聖母マリア信仰は，1930年にいたって，新たな時代，いわば聖母マリアの黄金時代を迎える。

この年，パリの中心近く，バック街にあったフィーユ・ド・ラ・シャリテ修道院の一室で，聖母マリアが少なくとも二回にわたって見習い修道女カトリーヌ・ラブレ Catherine Labouré（1806–1876）の前に現れた。フィーユ・ド・ラ・シャリテ修道院は，教皇ピウス7世とナポレオン1世との間に結ばれた政教条約（コンコルダ）によって再建された修道院の一つである。

この日付から50年間，すなわち，1830年から1876年までの間に，マリアはほとんどひっきりなしに民衆の前に現れた。このうち5件については，ローマ教会もその出現を「公式に」認めている。

1. 1830年11月18，19日。パリ，バック街の聖堂で，カトリーヌ・ラブレーに聖母出現。
2. 1846年9月19日。イゼール県ラ・サレット山にて，二人の羊飼い，メラニー Mélanie Calvat（1831–1904）とマクシマン Maximin Giraud（1835–1875）に聖母出現。
3. 1858年2月11日。オート・ピレネー県ルルドのマサビエル洞窟で，ベルナデット・スビルー Bernadette Soubirous（1844–1879）に聖母出現。
4. 1871年1月17日。マイエンヌ県ポンマンで，少年二人，少女三人に聖母出現。
5. 1876年2月11日，アンドル県ペルヴォアザンで，エステル・ファゲット Estelle Faguette（1843–1929）に聖母出現。

民衆は自発的に，マリアの現れた「奇跡の地」に大規模な巡礼団を組織した。聖母マリアは，19世紀を通じて，キリスト教のヒエラルキーの中で，最も高い地位に昇った。ジャクリーヌ・マルタン＝ブレネールにならって「ヴォルテールの世紀」に続く時代は，「マリアの世紀」と呼んでもよい[23]。

III.

大革命以来の危機によって傷つき，大きく信者や聖職者を減らしていたカトリック教会は，こうした民衆起源のマリア崇拝を革命によって失われた信仰を回復するため，教化的な意図に資する限りで自らのうちに回収しようとした。マリアの出現は，きわめて数が多く，民間信仰やオカルトなどさまざまな異質な要素に取り囲まれていた。教会は，それらの中から，いくつかの出現を公式に認定し，自分の監督・管理下に置いていく。1854年の教皇ピウス9世の教書『インエファビリス・デウス』Bulle «Ineffabilis Deus» によって公布された「聖母マリアの無原罪の懐胎（処女懐胎）」教義も，この文脈から考える必要がある。

聖母マリアの処女懐胎の教義に関しては，処女懐胎否認派（マキュリスト）と処女懐胎容認派（インマキュリスト）に分かれて，教会内部で1400年にわたって熱い議論が戦わされてきた[24]。それが，一方では科学の世紀と呼ばれる19世紀のこの時期になって，突然，教会の正式の教義として認められるのである。

1848年の2月に勃発したいわゆる2月革命とその後の政治的動乱，アナーキズムと「赤禍」の脅威を前に，権力の座に返り咲いたフランスの保守勢力は教会，特に，聖母マリアに助けを求めた。彼女にすがれば，革命と社会主義を追い払うことができると考えたのである。

2月革命の直前，1846年という時点で発生したラ・サレットの聖母出現はこの文脈の中で，カトリック側に最大限利用されていった。1846年，ラ・サレットに現れた聖母が明かした恐るべき秘密とは，1848年の革命の騒乱を預言したものだという噂がまことしやかにささやかれた。ラ・サレットが教会から正式に認められた1851年，グルノーブル司教，ド・ブリュイヤール Philibert de Bruillard（1765–1860）は，これまでも，地上に罪がはびこるとしばしば天から裁きがくだされたことを引き合いにだして，「今回の革命騒ぎは，“神の罰”だ」と信者に説明している。

> 皆さんに，ここで，聖母様がラ・サレットの山の上に現れた時期を思い出していただきたいと思います。1946年9月19日は，重大な出来事を先触れするものではなかったのでしょうか。皆さんご存じのように，その後，民衆が暴動を起こし，王位が覆され，ヨーロッパがひっくり返り，社会全体が破局の淵に追いやられました。さらに大きな災厄から私たちを守って下さり，またこれから起こる災厄からお守り下さるのは，天から私たちの山にお出ましになった聖母をおいてはありません。聖母様は，私たちの山に集結と救いの印を，光り輝く燈台を，青銅の蛇を据えられました。敬虔な魂を持つ者達は，目をあげてそれをしっかりと見据えることによって，神の怒りの矛先をかわし，癒しがたい傷から癒していただけるのです。[25]

教皇ピウス9世は，2月革命以前には，「新教皇主義」を唱えてむしろイタリア国内の自由主義・愛国主義の高まりに対して好意的な態度をとっていた。しかし，革命と動乱が彼の予想を超えて広がり出すと，突然態度を変えて，強固な保守主義者に豹変した。

ウィーン会議後，ハプスブルグ家の神聖ローマ帝国の支配下にあったイタリアでは，パリに2月革命が勃発し，ハプスブルグ家の本拠ウィーンにも騒乱が波及すると，独立と自由への機運が一挙に高

まった。ベニス，ミラノでは3月に入って民衆の蜂起が発生し，パルマ，モデナなどでは臨時政府が樹立された。また，フィレンツェ，ナポリなどでは，自由主義的な内容の憲法が制定された。サルデニア王，カルロ・アルベルト Carlo Alberto（1788-1849）は，この機に乗じて，オーストリアに対する独立をめざして北イタリアに侵攻した。

しかし，イタリアの騒擾は長くは続かなかった。サルデニアに続いて，トスカーナ，ナポリもオーストリアに宣戦布告し，緒戦こそイタリア勢が優勢だったが，オーストリアは自国内の革命騒ぎを収めると体制を立て直して，ラデツキー将軍 Josephe Radetzky（1766-1858）のもとイタリアの再征服に乗り出した。サルデニア軍は，オーストリア軍にクストーザで破れ，休戦協定が結ばれた。翌年の3月，サルデニア国内でイタリア独立派の勢いが強まり，オーストリアとの間で，再度戦争が始まったが，3月23日，ノバラの戦いで完敗し，カルロ・アルベルトは退位に追い込まれた。世にいう第一次イタリア統一戦争である。

教皇ピウス9世は，革命の動乱が身に迫ると，大急ぎでローマを離れ，シチリア王の庇護を求めて地中海に面した港町ガエタに難を避けた。

1849年，統一戦争の騒ぎが収まって，ローマに帰還したピウス9世は政治・社会的混乱を収拾し，揺らいだ教会の権威を固め直さなければならないと考えた。まず彼は，直接，カトリックの「敵」を攻撃するため「ノーティス・エト・ノビスクム」«Notis et Nobiscum» と題する教書を発表し，この中で特に社会主義を断罪した。また彼は，民衆の間に高まっていたマリア崇拝を利用して，カトリックの失地回復を図ろうとした。このため，ピウス9世は「ユニ・プリーヌム」«Uni Primum» と題する教書を各地の大司教に送り，各教区のマリア崇拝の現状を調査し，「聖母マリアの無原罪の懐胎」をめぐる教義を具体的にどのように定義すべきか意見を求めた。それに続いて教会内で激しい議論が戦わされたが，結局，1854年12月8日，「懐胎の最初の瞬間，全能なる神の恩寵と特権により，人類の救い主たるイエス＝キリストの功徳に配慮して，聖母マリアは，原罪の一切の汚点を免除された」[26]とする「聖母マリアの無原罪の懐胎」がドグマとして布告された。

このドグマの公認は，すでに触れた処女懐胎否認派（マキュリスト）と処女懐胎容認派（インマキュリスト）との長きにわたる争いに終止符を打ったという教義的な意義にとどまらず，19世紀の初頭以来カトリック世界を引き裂いてきたさまざまな対立を，ヴァチカンの権威を強化することによって解決したという意味で，きわめて重要な意味をもつものだった。

教会史家，ルネ・オーベールによれば，1854年の時点でのこの決定は，

1. ローマの中央集権的な権力を安定させ，ガリカニスムなど，各国教会の独立を指向する潮流に対して，教皇至上主義を強化し，
2. 神学上の問題に対する「教皇の無謬性」を確認するとともに，
3. 特に「神に反抗する」フランスにおけるカトリシズムの勝利を決定づける

ものだった[27]。

もう一つ，見逃してはならないのは，この教義が，イエスを「超えてはならない限界」と定義することによって，聖母マリアを，息子イエスに従属させた点だ。

つまり，ローマ教会の立場からすれば，あくまで崇拝の中心にあるのは「イエス」ないしはイエスの「聖心（サクレ・クール）」でなければならず，聖母マリア崇拝は，これに付随するものであっても，これを超えてはならないと，一定の枠組みを設定し，信仰を「正常化」しようとしたわけだ。しかし，ジャクリ

ーヌ・マルタン＝ブレネールが主張するように[28]，聖母マリアの聖心に対する信仰は，キリストの聖心に対する信仰より時期的に前に成立した以上，この「正常化」の試みはいささかアナクロニスムの感が否めない。聖母マリアの無原罪の受胎の教義が確立する背景は，すでに見たように，聖母マリアの出現と，聖母マリアに対する民衆起源の崇拝がある。しかし，「聖母マリアの無原罪の受胎」とは，単に文字にかかれた教義の示す「概念」というだけにとどまるものではない。一番に，マリアの姿は，例えば「受胎告知」とか「ピエタ」とか，聖書や伝承に由来するさまざまな場面を具体的に彫刻や絵画に表した一連の図像の形で，一般信者に示されてきた。中世以来，多くは文字の読み書きのできなかった民衆は，文字で書かれたり，神父の説教の中で語られる抽象的な教義より，彫像や絵画で示されるキリストやマリアの姿から，直接的・直感的に教義のエッセンスを理解していたことになる。「無原罪の受胎」とは，この意味で，数ある聖母の図像と，それに付された意味の中から，特定のマリア像と彼女に付された役割，ここでは神と人間との「仲介者」という役割を選び出すというきわめて政治的な行為であった。19 世紀のカトリック教会のとった一連の「戦略」は，ここでもマルタン＝ブレネールの言うように，ある女性のイメージが，彼女が象徴する宗教によって，政治的な道具として利用されていくかを示す，最もよい例だといえるだろう。

しかし，聖母マリアの出現はローマ教会が公式に認めた 6 回にとどまっているわけではない。聖母マリアに関わる，あるいは，イエスやイエスの聖心，天使，聖人はたまた十字架などさまざまなキリスト教のパンテオンに列なる「聖なるもの」の出現や神秘現象が，どれほど一般的にみられたかは，19 世紀末から 20 世紀初頭にこの問題をめぐって書かれた多くの書物のページをめくってみれば十分だろう。アレクサンドロ・エルダン著，『神秘のフランス』(1855 年)，キュリック師著『預言の声』(1871 年)，アドリアン・ペラダン著『19 世紀超自然年鑑』(出版年不詳)，J.-A. ブーラン『聖職年鑑』(1859 年)，同『聖性年鑑』(1869－1875 年)，B. サン・ジョン著『19 世紀フランス・聖母マリア叙事詩』(1904 年)，等々[29]。

IV.

さて，聖母マリアの出現という「超自然現象」は，民衆の間に蓄積していた実にさまざまな欲求に根ざすものであっただけに，教会関係者の政治的な思惑を超えて，しばしばカトリック教会が正統と認める圏域を大きく逸脱し，時には，その周囲にいわば「マリア派異端」とも言うべき正真正銘のオカルト・セクトや，秘密結社を多数生み出すことになった。確かに彼らの掲げる教義は，カトリック教会の正統教義とは相容れない奇妙かつ異様な教義に満ちていた。しかし，彼らは聖母マリアの出現にインスピレーションを受け，聖母マリアから特別の加護を受けていると主張していた。もともと，19 世紀の聖母マリア崇拝は，それ自体が「出現」という「超自然的」，ないしは「オカルト的」な現象をもとに成立したものであっただけに，「正統」と「異端」というはっきりした区別があったわけではない。例えば，1846 年，ラ・サレットの出現の証人メラニー・カルヴァがそうだ。

我々は，次稿において，聖母マリア出現の周辺に出現する一連の「異端」の問題を取り上げ，それが 19 世紀社会の中で持ち得た特異な意味について考察することにしたい。

註

1 この論考は筆者が現在執筆中のユイスマンスに関する研究書『ユイスマンスとオカルティズム（仮題）』（新評論社より近刊予定）を構成する1章として構想されたものをもとに，加筆・修正したものである。

2 Gérard Cholvy/Yves-Marie Hilaire, *Histoire religieuse de la France contemporaine*, t. 1., 1800/1880, Privat, 1986, p. 13. による。

3 F. de Chateaubriand, *Mémoire d'Outre-Tombe*, I, Gallimard, «Pléiade», 1951, p. 907. Cf. Claude Guillet, *La rumeur de Dieu, Apparitions, prophétiques et miracles sous la Restauration*, Imago, 1994, p. 43.

4 マドレーヌ墓地 Cimetière de la Madelaine。パリ8区にあった墓地。王族をはじめ，革命の犠牲者が多く葬られた。王政復古の後ルイ18世の命により「贖罪の聖堂」が建てられている。

5 フランス北西にある都市。12世紀にさかのぼるサン＝ドニ教会 Basilique de Saint-Denis があり，歴代フランス国王はここに葬られた。

6 Claude Guillet, *op. cit.*, pp. 58–65. の記述による。ベリー公の暗殺者ルヴェル Louis-Pierre Louvel（1783–1820）については，以下の記事を参照。Article «Louvel（Louis-Pierre)», in Pierre Larousse, *Grand Dictionnaire Universel du XIXe siècle*, Larousse, 1866–1876,（réimp. Lacour, 1991), t. 14, p. 736.

7 Joseph de Maistre, *Considérations sur la France, Œuvres Complètes* t. 1, Librairie générale catholique et classique,（1814), 1884, p. 11., cité partiellement dans Claude Guillet, *op. cit.*, p. 44.

8 創世記第4章に出てくるアダムとエバ（イヴ）の長子で弟のアベルを殺した。Cf.『旧約聖書Ⅰ　創世記』，月本昭夫訳，岩波書店，1997年，2004年，13–14ページ。

9 アースヴェリュス Ahasvérus あるいは，アハスヴェル Ahasver の名で知られる神話的人物。十字架を背負って刑場に向かうキリストに一瞬の休息を与えるのを拒んだかどで，永遠に地上を彷徨うことを運命づけられた。13世紀に書かれた年代記にはじめて出現するが，18世紀末から，ヨーロッパ各国の文学作品の中に，贖罪を体現する人物として盛んに登場するようになった。

10 Claude Guillet, *op. cit.*, p. 45.

11 ギリシャ神話の人物。トロイア戦争のギリシャ方総大将アガメムノーンとその妃クリュタイメーストラーの子。アガメムノーンはトロイア戦争から帰還後，后クリュタイメーストラーの愛人アイギストスに暗殺された。父暗殺の時，オレステースはまだ幼少だったが，長じてアイギストスと母クリュタイメーストラーを殺害し，父の復仇をとげる。アイスキュロス Aischylos Euphorionos（BC. 524–BC. 456?）の三部作『オレステイア』（453年に上演。『アガメムノーン』*Agamemnon*,『供養する女神たち』*Choephoroi*,『恵みの女神たち』*Eumenides* からなる）の主要登場人物。Cf. 呉茂一他編『ギリシャ悲劇全集Ⅰ』，人文書院，1960年，1979年。

12 紀元前340年，ローマ人がヴェゼリスの川岸でラテン人と戦った際，執政官ピュブリウス・デシウス・ムス Publius Decius Mus が，馬に拍車を与えてラテン軍兵士の隊列に突入を敢行，我が身を犠牲にしてラテン軍を混乱に陥れ，ローマ軍に勝利をもたらしたという故事を指す。ティトゥス＝リヴィウス Titus Livius（BC. 57–17）が『ローマ建国史』Ab Urbe Condita 第10巻に伝える。「ヴェゼリスの戦い」は，画題にもなっており，ルーベンス Peter Paul Rubens（1577–1640）も，タピスリーの原画として，計8枚からなるデシウス・ムス連作（1616–17年）を描いている（ウィーン，リヒテンシュタイン美術館所蔵）。

13 エリザベート・ド・フランス Élisabeth Philippine Marie de France（1764–1794）。ルイ15世 Louis XV の長子ルイ・ド・フランス Louis de France（1729–1765）と，彼の第二の妻，マリー＝ジョゼフ・ド・ザ

ックス Marie-Josèphe de Saxe (1731–1767) の娘。ルイ 16 世 Louis XVI (1754–1793), ルイ 18 世 Louis XVIII (1755–1824), シャルル 10 世 Charles X (1757–1836) の妹にあたる。ルイ 16 世のヴァレンヌ脱出事件の際, 国王一家と共に捕らえられパリに連れ戻される。その後, タンプル城, ついでコンシェルジュリ (パリ高等法院付属監獄) に幽閉され, ルイ 16 世の処刑後の 1794 年 5 月 10 日, 断頭台で処刑された。

14 Joseph de Maistre, *op. cit.*, pp. 38–39.

15 Claude Guillet, *op. cit.* p. 9.

16 この人物については拙稿「"神の死" とオカルティズムの猖獗—「19 世紀的なるもの」をめぐって　オカルトの世紀と聖母マリア (その 1)」(『学苑』No. 791 所収) の注 2 を参照。

17 聖女への列聖は 1920 年。

18 1836 年に「いと聖くけがれなき聖母の御心に捧ぐ修道会」を設立したデュフリッシュ＝デジュネット師は, イエスの聖心自体に語らせるというかなり大胆な手法で, 人々に母マリアの聖心の加護を祈るよう説いた。M. Dufriche-Desgenette, *Manuel d'instructions et de prières*, Sagnier et Bray, 12e édition, 1850, pp. 66–67. Cf. Claude Guillet, *op. cit.*, p. 11.

19 「マリアの神聖化は, 危険を伴っていた。イエスの母が処女懐胎したという教説は, 古代の多神教の神話や宗教に存在した処女神との混淆を避ける必要があった。数世紀にわたって, 神学者達は, まさにこのような今にも崩れそうな均衡状態のなかで, 危険な綱渡りをしながら, 足を踏み外さないよう細心の注意を払ってきたのだった」, Jacqueline Martin-Brener, «Le siècle de Marie», in *Générations de Vierges*, G. R. I. E. F., Presse Universitaires du Mirail, 1987, p. 55.

20 Stéphane Michaud, *Muse et madone*, Seuil, 1985, pp. 19–20.

21 F. de Chateaubriand, *Génie du christianisme*, Gallimard, «Pléiade», 1978, p. 903. Cf. Stéphane Michaud, *op. cit.*, pp. 19–20.

22 「サン＝シモン主義を掲げたプロレタリアや, その後, 彼らの運動を引き継いだ女性活動家達にとっては, 聖母マリアは自由を象徴する形象だった。教会はマリアが信仰にあつい民衆の精神的な母だとしていたが, 聖母をよりどころに, 社会主義者の女性達は, 社会生活への参加を要求した」Stéphane Michaud, *op. cit.*, pp. 10–11.

23 Jacqueline Martin-Brener, *art. cit.*

24 Jacqueline Martin-Brener, *art. cit.*, pp. 45–48.

25 L. Bassette, *Le Fait de La Salette*, Paris, Éditions du Cerf, 1955, p. 276. Cf. S. Michaud, *op. cit.*, p. 65.

26 René Aubert, «Le Pontificat de Pie IX», in *Histoire de l'Église*, tome 21, nouvelle édition, Fliche et Martin, 1953, p. 43.

27 *Ibid.*, p. 43.

28 Jacqueline Martin-Brener, *art. cit.*, p. 55.

29 Alexandre Erdan, *La France Mystique* (1855), Abbé Curicque, *Les Voix prophétiques* (1871), Adrien Péladan, *Les Annales du Surnaturels au XIXe siècle* (18 xx), J.-A. Boullan, *Les Annales du Sacerdoce*, (1859), *Les Annales de la Sainteté*, (1869–1875), B. St. John, *L'épopée mariale en France au 19e siècle*, (1904).

(おおの　ひでし　　総合教育センター)